

みみタロウ

日本語版 ☆118号 2016年6月

しがけんこくさいきょうかいほらんていあぐるーぶ「みみタロウ」
 滋賀県国際協会ボランティアグループ「みみタロウ」
 大津市におの浜1-1-20 ピアザ淡海2F
 Tel/Fax : 077-523-5646
 E-mail : mimitaro@s-i-a.or.jp
 URL : http://www.s-i-a.or.jp
 F : https://www.facebook.com/siabiwako

共に市民として

みみタロウは、多文化共生を掲げて活動するボランティア団体、長浜国際コミュニティー(NIC)の
 鎌倉アブリッショさんと長谷川幸子さんに、団体への意気込みをお聞きしました。



鎌倉さん: 25年前、ブラジルから兄弟と一緒に来日し、8年前に滋賀県にやってきました。当時は学費が貯まれば帰国する予定でしたが、まだ20歳だった僕は、日本で自分自身も大人として成長しながら世の中のことを学び、ここで自己実現ができる手応えを感じました。そして、多くの出稼ぎが滞在期間がのびるごとに日本に慣れ、住み心地が良くなっていましたように、僕も日本にすっかり魅了され、ここで暮らすことにしたのです。

来日当初は子どもたちに「外人さんや」と指をさされ一緒に笑つたものでしたが、今では田舎に行っても外国人はもう珍しい存在ではなくなりました。少しずつですが、日本の社会も変化をとげ、そして僕たちも出稼ぎからこの社会の住民へと変わりました。

日本社会は日本人から見れば色々問題を抱えているでしょうが、外国から来た者にとっては、政治、警察、教育、医療、社会保障など様々な分野がきちんと機能している羨ましい社会です。外国人は選挙権こそないものの、労働者として、市民としての権利があり、もちろん税金は払わなければなりませんが、豊かな社会生活を享受できます。しかし、仕事などの事情はありますが、ここに長年住んでいるのに日本語ができず、学ぼうともしない外国人は大勢います。理想は普通に日本人と同じ日本語で話して暮らすことで、あちこちに通訳を配置してもらうことではないのです。家賃を払えば自分たちのやり方で暮らせばいいという人もいるかもしれません、「暮らす」というのはそういうことではありません。この社会のルールを学んで、近所の人と挨拶をかわし、自分から地域に溶け込もうと努力しなければ。僕は時と共に日本人のような見方をするようになったのかもしれません。がいこくじんねがていぶいめーじせつたびがいこくじんかたかんががいこくじんおもふかがいこくじんあつれきませんが、他府県での日本人と外国人との軋轢や外国人のネガティブなイメージに接する度に、日本での外国人のあり方を考え、外国人が日本のお荷物になつてはならならないという思いを深めました。

そこで、NIC の登場です。2年前に長浜市の多文化共生円卓会議に参加し、そこで出会った他の外国人とともにクリスマス会を開催して大成功を収めました。外国人自身が声をかけることで、多くの仲間を引き込むことができます。この試みを一過性のものに終わらせずに発展させていくと、國籍を超えた住民同士が一緒に立ち上げたのが長浜国際コミュニティー、NICです。

NICは、ブラジルやフィリピンなど様々な国の外国人と日本人が、共に同じ地域住民として生活や地域の課題に取り組み、誰もが住み心地の良いまちづくりを目指して活動する団体です。一人でも多くの人とつながり、共に学ぶことで、少しずつ人の意識が変わり、そして社会も変わります。昨年度は、スポーツ大会、浴衣祭り、ハロウィン、クリスマス会などのイベントや、フェイスブックを通して日本語、ポルトガル語、英語で情報を発信し、多くの人の繋がりを作りました。今後は、防災や子育てなど暮らしに根付いた活動も計画しています。メンバーの国籍や文化も様々なので、それぞれ考え方ややり方も異なり、まとめるに大変な部分はもちろります。しかし、一緒に議論を積み重ね、共に活動することで、自分と異なる視点も知り、双方の良い点を併せ持ったすばらしいものを生み出すことができると思います。一人一人の航海を照らす町の灯台になることが、僕たちの夢。皆が安心して遠くまで航海できるよう、何か一つでも社会に残すことができれば、万々歳。僕たちの試みが、次世代に託す一粒の種となれば幸いです。

長谷川さん: 様々な国籍のすばらしい人々が同じ思いの下に集まるということ自体、宝物のように感じています。この卵が大きく育つよう、日本社会との繋がりの面でも力を入れたいと思います。外国人が日本のことを学ぶだけではなく、外国人から私たちが気づくこと、一緒に学ぶことがあります。共に地域の担い手である外国人と一緒に楽しいまちづくりができるとわくわくしているんですよ。